

氏 名 (本籍)	オリヴィエ クリシャー (オーストラリア)
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術 学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 5444 号
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	Making "Oriental" Art History: Ōmura Seigai and Sino-Japanese Art Relations in the 1910s-20s

主 査	筑波大学准教授	Dr. Phil.	長 田 年 弘
副 査	筑波大学教授	博士 (芸術学)	五十殿 利 治
副 査	筑波大学講師	Ph. D	TRAN, John
副 査	実践女子大学教授	Ph. D	児 島 薫

論 文 の 内 容 の 要 旨

本研究は、大村西崖（おおむら・せいがい、明治元－昭和 2〔1868-1927〕年）の芸術活動を取り上げ、二十世紀初頭における日本と中国の間の芸術関係という広範な問題に関わる言説の検討を試みたものである。これまでほとんど顧みられることのなかった、大村の後半生における日中美術交流の様相に着目し、また文人画の「復興」運動について論じた。画家としての制作を通じて、東洋的な芸術表現を体現し、「支那」文化圏の確立を企図した大村の芸術活動について解明を試みるものである。

第 1 章では、先行研究についてまとめ、本研究による新知見を明確化した。第 2 章では、大村の生涯を概観し、さらに彼が本格的な活動を開始する以前の 1870 年代 80 年代における、日本における文化財、国宝の概念の形成について述べる。

第 3 章は大村の思想形成期について記述する。後の「支那・東洋」美術史構想との関連において重要な基礎となった、東京美術学校期における森鷗外と今泉雄作の影響について詳述する。前者による Eduard von Hartmann の美学理論と後者による仏教学の講義について述べ、大村の美術理論の形成と後の芸術活動のモデルを検討する。

第 4 章では、大村の活動が特に活発になる 1906 年から 1918 年までの間を扱う。東京美術学校の東洋美術史教授と、真美書院の主任編集者を兼任していた時期である。1910 年代半ばから大村の活動には変化が生じ、より学術的な自費出版の書物を発行した。1915 年の『中国美術史－彫塑篇』や 1918 年の『密教発達志』は多くの中国の古代資料を使った研究書であり、まだ大陸へ渡ったことのなかった大村が、資料を通じてできる限り専門の対象に近づこうと試みたことが窺える。

第 5 章では、美術の研究から創作活動へ転換した様相を記述する。1919 年に友人と「又玄画社」（ゆうげんがしゃ）を創立し、文人画を描き、展示・出版を積極的に行った。1921 年にはその活動の概要や方針を示す『文人画の復興』を発表した。その中で、大村は日本の美術界を動かそうという意図で中国の「文人的」作品や伝統を調査し日本の美術界に普及させることが目的だったと述べた。同年 10 月の第一回中国渡航は、それ以前から日本で行っていた文人画の復興活動を反映する側面を持っていたと考えられる。

第6章では、大村の東洋美術史観を総合的に検討し、四度にわたる中国旅行の意味について述べる。大村に「支那」と呼ばれたものは、近代化へ向かっていた中国そのものよりも歴史的・文化的な空間であり、ある種の普遍的な中国を中心とした東洋文化圏であった。陳師曾（ちんしそう、1876-1923）をはじめとする中国の文人画家との共同事業のために、1922年-1926年の僅か四年間に四度にわたり渡中し、出版、展示、教育や自身の文人画制作を続け、「支那的」文化圏を実現しようとした。

大村は文人として、自分の東洋美術史論の対象である「支那的」東洋そのものを具体化することを試みた。その試みは、当時の政治、知識、文化的な思潮に応ずるものであり、歴史における「文人」の立場を知的な立場から再評価することであった。

付録として『文人画の復興』の注釈付き英語訳を掲載した。

審 査 の 結 果 の 要 旨

近代国家日本の成立を背景とする、明治期における「日本美術史」の形成に関しては、北澤憲昭、佐藤道信らを始めとする優れた美術史研究の蓄積がある。しかしこれらの先行研究においては、岡倉天心と並ぶ大村西崖の業績に関しては、「東洋美術史」家としての側面にのみ光が当てられ、文人画制作を行い、「文人」の概念を自ら体现しようと試みたこと、また中国歴訪やその後の中国紹介等の交流事業については、顧みられることがなかった。本論は日中美術関係という大きな視点から大村の再評価を試みるものであり、研究史上の大きな盲点を照射する試論である。

第一章では大村による美術理論の概要を紹介し、また、本論において扱う日中関係の範囲について規定する。本論では単なる日中文化交流ではなく、社会、文化、経済的な field を扱うゆえ、「日中関係」の語を用いること、Pierre Bourdieu 等の研究を方法論的な基礎とすることが記述される。

第二章と第三章においては、それぞれ大村が活動を開始する以前の明治期における芸術をめぐる諸概念(文化財、国宝など)の形成と、大村の思想的基盤となった東京美術学校における今泉雄作、森鷗外による影響について述べる。また1870～1880年代における写真技術や博覧会等について検討が加えられる。第四章は大村による東洋美術史の形成について再考するものである。大村は研究史において既に知られるように、大型美術書籍『真美大観』、『東洋美術大観』を出版し日本美術史の確立を促した。真美書院発行のコロタイプや木版画を用いた豪華な大型の美術書籍からは、複製出版技術の進歩と美術史の進展との関連を窺うことができる。しかし1915年に出版された『支那美術史－彫塑篇』、1918年の『密教発達志』では、写真や碑文など中国の原資料を重視する姿勢を鮮明にし始めた点が指摘される。本論における、1921年の中国訪問以前の大村の对中国観の展開に関する重要な指摘である。

第五章では、大村による文人画「復興」運動について記述する。文人画制作を通じて自ら「文人」として東洋的価値を体现し、また訪中を通じて、日中の芸術的な共有空間を実現しようとした試みを明らかにしている。

本論にはまだ、いくつかの検討課題が残されている。例えば、大村と前後する瀧精一、今泉雄作の美術理論と、本論において展開された大村の活動がどのように関わるのか、また、「東洋美術史」概念が形成される過程を大村以外の視点において記述すること等である。しかし、冒頭に述べたように、本研究は先行研究において見過ごされていた、大村による文人画復興と日中美術関係の推進について客観的に再評価を試みたものであり、その意義は非常に高い。また、著者が日本語、ヨーロッパ語のみならず、中国語の文献にも広く通曉し、先行する調査に比べ研究領域を拡大することに成功していることを特に指摘したい。

よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。